

第二章 幼児の漢字教育はこうしてやる

漢字教育はいつから始めるか

漢字は零歳から憶えることが出来ますが、零歳から漢字学習を始めると、韓国の天才児・金雄鎔君の例のように、三歳でどんな本でも読めるようになり、十歳くらいで高校卒の実力がついてしまいます。

しかし日本では、どんなに実力があっても、年齢に従った教育しか受けることが出来ない、という制度になっています。だから、日本では、金雄鎔君のような子供は、どこの学校でも受け入れてくれません。これでは困ります。

従って漢字教育は、零歳から始めるのが最も有効ですが、わが国の実情からしますと、三歳くらいから始めるのが最も良いのではないかと考えます。

あとで述べますが、誤った乳幼児教育のために、このごろ問題児が多くなっています。



幼児は決して漢字をきらわない。三歳から学習すれば入学まで1000字も

自閉症的な傾向の強い子供、言葉の発達の遅い子供が多くなっています。こういう子供の場合は、気が付き次第、一日でも早く始めた方が良いのですが、一般には、三歳の誕生日を機に始めたら良いと思います。

三歳から就学まで三年あります。毎日一字ずつ漢字を覚えていったら、三年間には約一千字の漢字が覚えられるはずで、現在、小学校を卒業するまでに学習する漢字が、全部で九九六字、約一千字です。

ですから、三歳から毎日一字ずつ漢字を覚えていけば、小学校に入学する時には、小学
生向けの書物は、およそどんなものでも読んで理解することができるようになるわけ
です。

どんな学習でも、教科書を読んでそれを理解することが最も大切な基本です。それが、
小学校へ入学した時からすらすらすらとうまく運べば、すべての教科学習に成功することが容

易に出来るはずです。

そういうわけで、私は、三歳から始めるのが良い、と考えています。

まず、言葉の教育を……………

人間は、言葉を覚え、言葉を使えるようになって、初めて人間としての能力が身につくのですから、言葉の教育ほど大切なものはないと言えます。その教育は、主として母親の担当です。

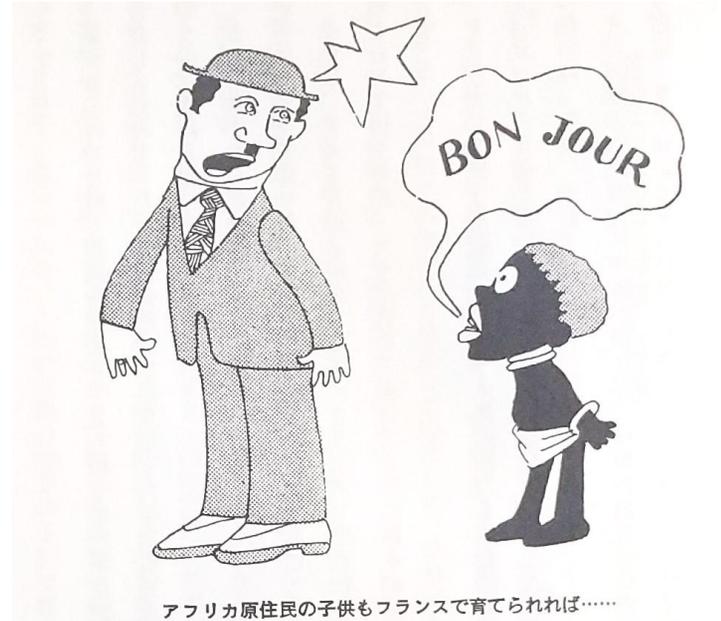
だから、人間としての能力は、その母親によって作られる、ということが出来ます。その母親の行う言葉の教育の上手下手が千差万別ですから、人間の能力も千差万別に分かれる、というわけです。

少しでもより評判の高い大学や高校に入学させることには熱心な親が多いのですが、それよりも重要な、幼児期の言葉の教育には、無関心な親が多いのは、結局、その重要なことを理解していないからです。

狼少女のカマラは、言葉を習得すべき大切な幼児期を狼に育てられたため、狼の吠え方しか習得しませんでした。人間の生活に復帰して九年間に覚えた言葉が、僅かに四十五語だったというのは前にも述べた通りです。

また、ポール・ショシャルの調査によれば、アフリカの原住民の子供たちの知能指数の低いのは、その家庭や社会で語られる言葉の数が少ないためである、と推定されています。

それは、アフリカの子供たちでも、フランスで生まれるか、少なくとも幼児期をフランスで過ごした子供たちは、フランスの子供たちと同じ高さの知能に達していることで推定



されたのです。

アメリカの人間工学研究所が、「人間の能力も社会的地位も、その人間が理解している言葉の豊かさに正比例している」と発表しましたように、人生に成功するために最も必要な基本的な能力は、言葉です。

その言葉の力を偉大にするか否かは、母親の教育の仕方にかかっているのですから、母親た

る者は、まず何よりも「言葉の教育法」を会得しなければなりません。

言葉の教育は母親の仕事

「学^{まな}ぶ」という言葉は、昔は「まねぶ」と発音し、「真似る」ことを意味する言葉でした。その「まねぶ」ことを意味する言葉が、「まなぶ」と「まねる」との二つの言葉に分かれ、その意味や使い方が別々に分かれて発展して来ました。けれども、「学ぶ」ことの本質はやはり「真似る」ことにある、と私は思っています。

子供は、母親を始め、周囲にいる人々の言葉を耳にし、それを「真似」ている間に、その意味や使い方を理解し、記憶し、それが使えるようになるのです。

時計や眼鏡という言葉にしても、「これが時計というものですよ」「これが眼鏡ですよ」

というように教えられるよりも、「お父さんの時計をいたずらしてはいけません」とか「テーブルの上の眼鏡を持って来てね」とか、叱られたり、用事を言い付けられたりしている間に自然と理解し、覚え、真似することによって言葉を覚えていることが多いのです。

アメリカで、赤ちゃんを、人間の言葉の飛びかう所で育てたものと、言葉の間こえない静かな所で育てたものと、この二つのグループの赤ちゃんの知能を比較してみたところが、前者の方が後者よりも遙かに優れていた、と報告されています。

赤ちゃんは、生まれ落ちた瞬間から、言葉を耳にし、それを記憶し、それを真似することによって言葉を覚え、言葉を覚えることによって人間としての能力を身につけるのです。言葉を覚えないうちは、チンパンジーの赤ちゃんよりも能力が低い、とさえ言われています。

赤ちゃんは、真似ることによって、言葉を学ぶのですから、真似るべき言葉を赤ちゃんに出来る限り多く聞かせることが必要です。

ですから、母親は、出来る限り赤ちゃんに語りかけるように努力しなければならない、と私は思います。

言葉教育は零歳から

赤ちゃんが、片言を言い始めるのは、一般に、生後八か月を過ぎたころです。それまでは喃語期なんごと言って、「ウーウー」とか「バーバー」というような、全く意味のない発声をしています。この時期に、母親は、簡単な言葉をはっきりとした発声で、やさしく語りかけてやるのが大切です。

母親の言葉を耳に反復して聴くことによって、それを発声することは出来なくても、そ



赤ちゃんのそばで夫婦喧嘩はしないように

れを頭の中に蓄えることは出来るのです。だから、「マンマ」と赤ちゃんに語りかけてごらん下さい。赤ちゃんは、じっと母親の口を見つめるでしょう。

片言期に入りますと、母親の語りかける言葉を一心に聞き取ろうとするかのように、母親の口元を見つめ、それが「マンマ」「ウンマ」というような、発音しやすい言葉だと、すぐに真似て「マンマ」「ウンマ」と言うようになります。この時の赤ちゃんの姿は、実に真剣そのもので、母親の言葉を完全に真似せずにはおかない、という努力が見られます。

だから、それから二年くらいの間に、日本語の正しい語法にのっとった話し方で、言いたいことが言えるようになります。大阪に育てば大阪弁を、東北に育てば東北弁を、実際に見事に身につけて、微妙な発音を巧みに寸分の違いもなく発音できるようになるのです。このように、赤ちゃんの「真似る」(まね)能力は実に高いのですから、赤ちゃんの目覚めている時には、大人同士の会話でも、やさしい、美しい声で話すように努力するこ

とが大切です。勿論、夫婦喧嘩など慎まなければなりません。こんな幼い赤ちゃんだから大丈夫だ、などと考えたらとんでもないことです。「幼い赤ちゃんだからこそ、気を付けなければいけない」のです。言葉が話せなくても、言葉を頭の中に蓄えることは出来るのですから。

言葉の教育はまず耳から

私の親しくしている方が、

「私たち夫婦は決して子供の前で田舎の言葉を使ったことはなく、また、そういう言葉を使う人も、この辺にはいないのに、うちの子は、このごろ急に口が達者になりましたが、田舎の言葉の調子が出るんです。言葉でも遺伝ということがあるんでしょうか」

と、私に話しかけたことがあります。

「そのお子さんを、赤ちゃんの時、田舎のお婆ちゃんの家に残けたことがありますか」と私が尋ねますと、「妻が病気をした時、半年ほど預けたことがあります。けれども、それはまだ口が利けない頃のことです」という返事でした。

「それですよ。赤ちゃんは、口が利けなくても、耳の穴はあいていて、ちゃんとそれを聞いて頭の中に蓄えているんですよ。赤ちゃんは、口が利けるようになってから言葉を覚えるのではなく、口が利けないうちから、せっせと聞いた言葉を頭の中に蓄えているんですよ」と、話したことがあります。

このような例は、たくさんあります。赤ちゃんは、生まれてから耳にする言葉を覚えていたのであって、それまでは、頭の中には何もありません。だから、日本語でも、英語でも、どこの国の言葉でも、耳にするものは何でも覚えるのです。



ウエブスターは四か国語の中で育てられて……

ウエブスターの辞典で有名なウエブスターは、赤ちゃんの時、お父さんは英語、お母さんはドイツ語、というように、四人の家族から四つの言葉で語りかけられて育ったため、四か国語を身につけました。

ウエブスターが天才であったから、赤ちゃんのうちから四か国語を覚えたのだ、という人がありますが、決してそうではありません。

赤ちゃんは、だれでも、語りかけてくる言葉を何でもみんな覚えてしまうのです。

音楽の才も幼児期に養われる

脳の最も発達する生後の三年間は、同時に最も多くの物事を吸収し、身につける時期であることを世の母親たる者は、よくよく覚えておく必要があります。

世界的なヴァイオリニストを何人も育てられた鈴木鎮一先生は、次のようなことをおっしゃっています。

「生まれたばかりの赤ちゃんに、毎日、美しい音楽、たとえば、バッハとか、モーツァルトとか、とにかく名曲を、すぐれた演奏家によるレコードで、毎日何回か聴かせるのです。それは必ず同じ曲のレコードでなければいけません。そうしますと、その赤ちゃんは、

半年くらいでメロディーも、リズムも、そして音楽のセンスもちゃんと身につけてしまうのです。

それをためすのは簡単です。毎日聴かせている曲の前に、もう一つの別の曲をつないだテープを作って、それを掛けるのです。そうしますと初めて聴く曲の方は「おやつ」というようにじつと聴いています。次に、毎日聴いている曲に移りますと、途端に、目を輝かして、「ああ、いつもの曲だ」と言いたげの表情で、母親の方を見てニコツと笑います。そして休をゆすって、リズムに合わせ、踊るような様子を示します。これは、生後六か月で、その音楽を身につけた証拠です」

鈴木先生は、

「ベートーベンは、決して生まれつきの音楽の天才であったのではない。父親が優れた音楽家であり、そのため優れた音楽を、生まれ落ちた時から繰り返し聴いて育ったから

楽聖になれたのだ。もしも披が、音痴の親に育てられたとしたら、必ずや音痴になっていかに違いない」

と、おっしゃって、音楽家としての才能は、生まれつきではなくて、環境にあり、育て方にあるのだ、と断言されました。それで、名曲を「反復して」聴かせることの大切なことを強調されているのです。

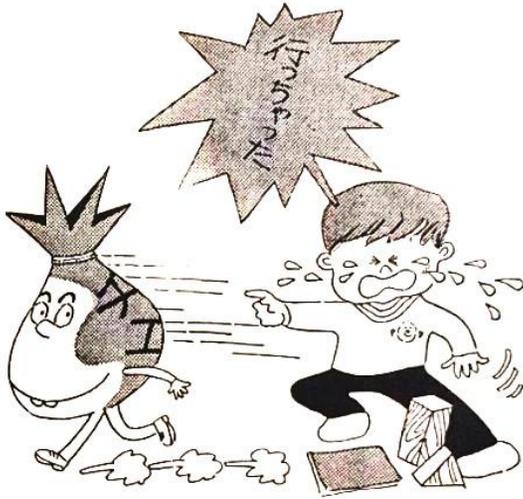
子供は繰り返しが好き

このように、音声を聴き取る能力は、生まれ落ちた時からありますが、その能力は、同じものを繰り返し繰り返し聴くことによって発達するのです。決して、生まれつきのものではありません。

だから、音楽でも言葉でも、同じものを繰り返し聴かせることが大切です。大人には退屈で耐えがたいこの繰り返しですが、幼児にとっては好きでたまらないのです。幼児の成長発達を望む造化の神の配慮だと、私は反復好きの幼児の姿を見る時、いつもそう思います。

岡潔先生（世界的な数学者・文化勲章受賞者）がお孫さんを観察されて、「赤ちゃんに鈴をリーンと鳴らせて聴かせる。最初は、おやっというような表情であり、二度めは、何か聴いたような音だとも言いたげの、遠くをじっと見つめるような表情になる。それが三度めになると、もっと聴かせてくれ、もっともっと、という要求に変わる」

と、おっしゃっていますが、幼児の姿、幼児の本性を実によく説明していると思います。繰り返しがたまらなく好きだという、幼児のこの特性を満足させる努力をすることが、最良の教育法ですが、とりわけ、言葉の教育ではこの「繰り返し」が大切です。ところが、大人には、たいてい、この「繰り返し」が苦痛であって、幼児の希望をかなえてやれない



幼児の一人遊びは知恵遅れのもと

うらみがあります。

それどころか、最近では、「幼児を出来るだけ一人遊びさせておくのがよい」という誤った考えが行われていて、放任したままで、話しかけることをしない母親が多い、という恐しい傾向があります。

そのため、言葉の遅い、知恵遅れの子供が多くなっています。母親が語りかけてやらなければ、幼児は言葉を覚え、言葉を使うよう

にはなれません。そういう子供は必ず知能の発達が遅れます。

テレビに子守りをさせないで

岩佐京子という方が「テレビに子守りをさせないで」という書物を書いて、世のお母さん方に警告を発しています。テレビを見せておけば、独りでおとなしく見ているので、親の手が省けてよい、というので、テレビに子守りをさせている親が多いが、テレビに子守りをされて育った子供は、言葉の発達に支障のある者が多い、というのです。

テレビを見せておけば、人間の言葉を聴く機会も多く、早く言葉を覚えて、良い影響があるのではないか、そう思われそうですが、しかし現実には、自閉症的な子供が多く作られているのです。

最近、この自閉症的症状を示す子供が多くなっていますが、自閉症とは、人間の声に対して反応しない、一種の精神病とも言える恐しい病状で、そのため人間性が育たず、結局人間として失格者になってしまうものです。

私も、何人かのこういう子供の治療に当たりましたが、人間の声に反応しないので、教育のしようがない、というのが本音です。一旦こういう子供になったら、なかなか治すのが困難です。ところが、テレビを家から追放してしまつたら治つた、という事例が多いのです。

そうしてみると、テレビに原因がある、と言わざるを得ないでしょう。私は、その原因を、次のように推定しています。

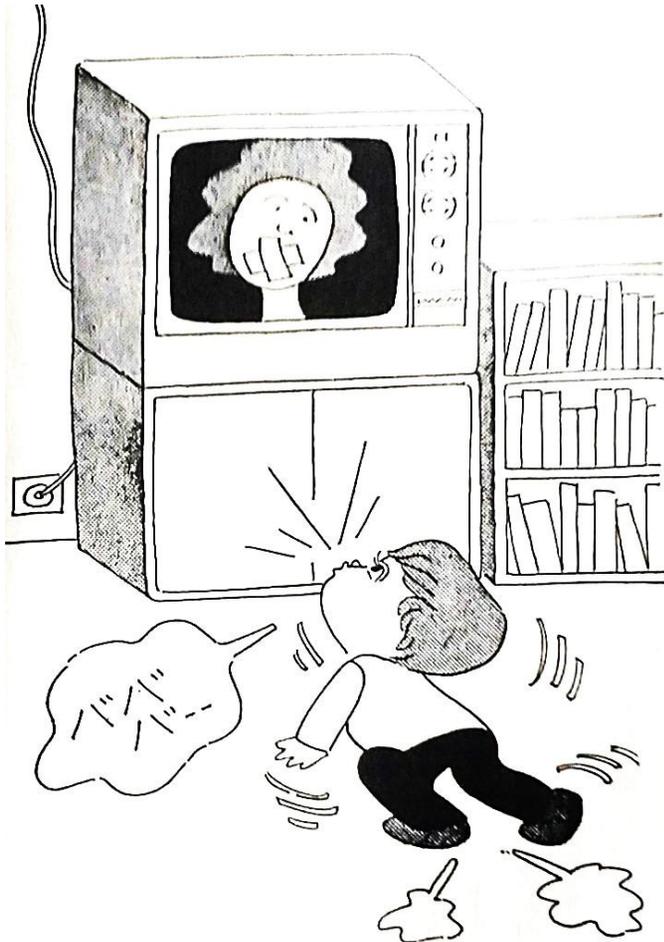
人間の声を、人間は左側の脳で受け取っていますが、その他の音は、右側の脳で受け取っています。人間の声は、その他の音と違って、やりとりするものです。人間の心を

表現したものですから、人間の声から人間の心を感じ取らなくてはなりません。そういう大事な働きを持った人間の声は、その他の音と違った反応がすぐに取れるように受け取る場所が、全く別になっているのだ、と思われれます。

心のこもった声で

人間を真の人間たらしめているものは「言葉」であり、その言葉を言葉たらしめているものが「声」です。だから、その「声」は、他の音とは違って、左側の脳がこれを処理しているのであって、これを「優位の脳」と呼んでいます。

だから、赤ちゃんに「声」を掛ける時は、心をこめて語りかけなければいけないのです。はっきりと、他の音と違った扱いをしなければいけないのです。そうすれば、赤ちゃんは、



赤ちゃんが話しかけてもテレビは答えてくれない

その声に心を感じ、赤ちゃんも心をもってそれに応じようと努め、声を出そうと努めます。こうして、赤ちゃんは「声」に応ずることを覚え、脳の左側の部分を発達させていくわけです。

ところが、テレビやラジオは、人間の声であっても、それは「機械の音」に過ぎません。赤ちゃんに語りかけられたものではありません。また、赤ちゃんがそれに答えたとしても、テレビやラジオはそれに反応しません。一方的に聞こえてくるだけですから、恐らく、人間の声であっても、右側の脳で処理されるのだと思います。だから、右側の脳だけが発達するのではないか、と思うのです。つまり、左側の脳が発達しないのではないか、と思うのです。

それはともかく、赤ちゃんには、初めに、人間の声とその他の音を、はっきりと区別して反応するような与え方をする必要があると思います。人間の声に対する反応を鈍くしてしまつたらおしまいですから……。

人間の声もその他の音も同じように与えるテレビやラジオは、生後の三年間くらいは、ぜひ避けるようにすべきだと思います。生後の三年間に、人間の声とその他の音との違いをよく認識させておけば、脳が左右ともよく発達するので、あとは、テレビやラジオが役に立ちこそすれ、決して有害なものにはならない、と私は思っています。

生後の三年間は……

生後三年間は、「人間の声とその他の音とまぎらわしいテレビやラジオを遠ざける」ということはむずかしいかもしれませんが。しかし、もし子供がそのために自閉症になったとしたら、それこそ大変です。『君子は危きに近寄らず』です。まして、最愛のわが子のた

めに、テレビやラジオを遠ざけるのですから、多少の不便は忍んだ方が賢明というものです。少なくとも、子供の耳に届かない所に置くべきです。

人間の声とその他の音と、その処理の仕方がちゃんと分かるようになったら、今度はテレビやラジオも役に立つのですから、それまでの忍耐です。

人間の声は、心がこもっているものでなければなりません。愛の心をこめて、優しい発声で赤ちゃんの目を見つめて語りかけることが大切です。そうすれば赤ちゃんも、一所懸命にそれに答えようとするでしょう。その答えは「アーアー」とか「ウーウー」という声にしかならないかも知れませんが、でも、その声には、赤ちゃんの心がこもっているのです。

その声に、母親は答えてやらなければいけません。

こうして、言葉にならない「声」をやりとりして会話ならぬ会話をすることが、赤ちゃんにとって何よりも大切なことだ、ということをよく知っておいて頂きたいと思います。

こういう「会話」を乳幼児期に繰り返しかわしていれば、必ず「声」に敏感に應ずる、暖かい心を持ち、高い知能を備えた子供になるに違いない、と思います。

生後の三年間は、こういう母親の育て方が何よりも大切であり、絶対に必要です。だから、どこの国だったか、生後の三年間は、働く母親を家庭に帰して、赤ちゃんの養育に専念させている、と聞いています。勿論、その三年間は有給です。育児こそは、社会の最大の仕事なのですから。

母親の言葉の力

まだ生まれたばかりの赤ちゃんに話しかけても、わかるはずはありません。しかし、それは決して「むだ」な行為ではありません。そういう、「むだ」と見える行為によって、

実は赤ちゃんは言葉の学習をしているのです。

おむつを換える時も、黙ってしないで、「ターちゃんはいいい子ね、いい子ね」と声を掛けてやったり、「きれいきれいしましうね」と話しかけてやるのが、赤ちゃんにとって、何よりも必要な「言葉の教育」なのです。

こういう言葉を、繰り返し繰り返し聞くことによって、赤ちゃんの脳の左側の部分は発達していくのです。だから、無口のお母さんでは、赤ちゃんの脳は発達せず、知能が伸びません。

アメリカの保育所の調査によりますと、保育所で預かっている一歳二、三か月の幼児に、毎日、十五分くらい、話を聞かせてやるグループとそうでないグループとに分けて、それを半年間続けたところ、毎日十五分ずつ話を聞かせていたグループの子供たちの方が、そうでないグループの子供たちより、ずっと知能が伸びた、という報告があります。



おむつを替えるときでも、やさしく話しかける

このように、三歳までの幼児の知能の発達には、母親か、あるいは母親に代わる人の話しかけが必要です。

また、早口の親に育てられた子供は、必ず早口の子供になります。乱暴な大声で話す親に育てられた子供は、やはり乱暴な大声で話す子供になります。

だから、親は、赤ちゃんの耳の届く所で話をする時には、乱暴な言い方を慎しみ、出来る限りやさしい調子で話すように心掛けなければなりません。

まして、赤ちゃんに語りかける時には、美しい声の発声練習のつもりで、出来る限り、愛情をこめて、やさしい調子で語りかけなければなりません。そういう親の努力が子供を立派な人間にするのです。

同じ話を繰り返して

子供を知能の高い子供にしたかったら、話をしてやることに努めなければなりません。

幼児は、話を聞くことによって、言葉を理解し、言葉覚え、言葉を使うことが出来るようになるのです。

幼児は、母親からお話を聞くことを何よりも喜びます。昔話など、毎日、何回聴いても決して飽きるということを知りません。だから、気に入ったお話は、一日に何回も繰り返して話すように求めます。

私も、娘が幼児だったころ、毎晩、就寝する時刻になると、同じお話をせがまれました。

少しも飽きないのです。それも、毎晩、同じ話を三回もさせられます。終わるや否や、「もう一回」と言っのです。

いくら可愛い娘のためでも、毎晩、同じ話を三回繰り返すのは、大人にとっては忍耐の要ることです。時にはつらくて、話を早く終えようと思って省略しますと、娘は途端に「違う」と言います。とぼけると、その省略した所を自分で補います。

それほどよく憶えてしまっても、父親にその話をしてもらいたいです。そして、お話の同じところで、きまっておもしろそうに笑うのです。「よくも同じお話でこうも楽しそうに笑えるものだ。うちの娘は少し足りないのではないかしら」と、心配したこともありましたが、しかし、実はそうではないのです。これが子供のほんとの姿で、それだからこそ言葉を習得して、言語能力を育てることが出来るのです。大人のように飽きっぱかったら、言語能力は決して育ちません。

同じ話を繰り返しせがまれる親はつらいでしょうが、子供の能力を伸ばすためには、我慢して、いやな顔をせずに、繰り返し話してやらなければなりません。また、親としては、

お話をせがまれる親にならなければ、良い親だとは言えない、と思います。

幼児の質問に対して

大脳生理学の大家だった時実利彦先生は「一生のうちで、最も吸収力の強い時期は幼児期である」とおっしゃっています。そういう幼児期の幼児は、知識欲が旺盛で、見るもの聞くものにつけて、「これなあに」「あれなあに」と質問を連発して止まるところを知らません。

しかし、その答えによって、その子の知識が組み立てられていくのですから、幼児の質問は大事にし、ていねいに答えてやらなければいけません。

ただし、いくら知識欲旺盛でも、幼児が欲しくない時に、欲しくない事柄について説明して

やっではいけません。食欲のない時に、無理矢理に口に詰め込むようなもので、消化できないばかりか、食欲をそこね、体をそこねることになります。

湯川秀樹博士の『旅人』という書物によりますと、博士のお母さんは、博士が訊ねた時にはどんな仕事をしていても、手を休め、博士の方に向き直って、その目をじっと見つめながら答えてくれた、と言います。

こういうお母さんに育てられたから、博士は立派な人になれたのだ、と私は思いました。子供の質問を、このように尊重し、真剣に答えてくれれば、だれだってそれを大切に受け入れ、「また質問しよう」という気持ちになります。それが、その子を成長に導くのです。

これに反して、忙しい時や機嫌をそこねている時など、子供の質問を、剣もほろろの冷たい仕打ちで追いつ返す母親があります。こういうことが重なりますと、決して質問しない子供になってしまいます。



幼児の知識欲には母親がどんどん栄養を与えよう

幼児が早い時期にこうなってしまうたら、もう知能の高い子供になることは不可能です。だから、どうしても質問好きの子供にしなければなりません。それには、母親は、常に子供の質問に対して、快く誠意を以て返答してやる必要があります。

幼児語はなるべく避けて

習慣というものは、ちょっとしたことでも、なかなか改めにくいものです。改めようと思えば簡単に改められるはずですが、そうは理窟通りにいかないのが習慣というものです。だから、初めが大切なのです。それで、私は、なるべく幼児語を使わないようにしようと考え、自分の子供にその方針で接しました。「幼児語を使うので幼児は可愛い」と、思いがちですが、決してそうではありません。幼児が可愛いから幼児語が可愛く聞こえるのです。

どんな言葉でも、幼児の言葉、とりわけ、わが子の言葉は可愛く聞こえます。だから、なるべく途中で直さなくても済む言葉を教えた方が、子供のために良い、と私は思います。ただ、幼児には発音しやすい音声と、発音しにくい音声とがあります。たとえば、「サシスセン」や「ラリルレロ」など、幼児には発音しにくく、「ざ」は「だ」に発音されやすいものです。

だから「お父さん」が「お父たん」となり、「ラッパ」が「ダッパ」となってしまます。その時は、どんなに繰り返して正しい発音を聞かせ、言い直させても、発音できないのですから、早く直そうとあせってはいけません。

ただ、その誤った発音を真似て、親が同調して言うのは良くありません。親が「お父たん」といつちよにあとぼうね」と言っていますと、それが正しい言い方だと、頭の中に刻み

具象的な言葉から抽象的な言葉へ

つけられて、あとで直せなくなってしまふ恐れがあります。

幼児が「ダッパ」と言っても、親が言う時は「ラッパ」でなければいけません。幼児はそのうちに、発音の違いに気づき、それを直そうと努めますので、周囲が良い発音をするように努力していれば、幼児の発音も自然に立派な発音をするようになっていくものです。

幼児の誤った発音を直すことより、良い手本を示すことの方が大切です。

幼児は「具体的な形を備えた実在」を表わした言葉は、すぐに理解し、覚えませんが、抽象的な言葉はなかなか理解できません。だから、言葉の与え方としては、「易から難へ」という原則に従って、具象的な言葉を十分に与え、だんだん抽象的な言葉に進めて行くと



ゴミを見て「むし」などと言う子供に育てては……

いう手順を取ることが大切です。

よく「鳥」とか「虫」という言葉を幼児に何気なく教えていますが、「鳥」という鳥や「虫」という虫は現実には存在していません。存在するのは、鳩、鶴、鶏であり、蜂、蟻、蛇です。それなのに、これらをすべて「鳥」「虫」と教えたのは、幼児にはとても理解できません。こんなに形も大きさも違

うのと同じ名前を与えられたのでは、頭の中が混乱するばかりです。幼児がごみを見付け「むし、むし」と言うのは、無理からぬ判断だと思います。

鳩だったら「これは鳩よ」と教え、蟻だったら「これは蟻よ」と言って教えるべきだと思います。そうすれば、幼児はすぐにこれを理解し覚えます。形や大きさはほぼ一定していませんから、一度教えたら見違えることはありません。

こうして、鳩や鶴や鶏や雀や鳥を覚えたら、それらに共通する「翼がある」「全身羽毛に覆われている」「足が二本」そういう認識を通して初めて「鳥」という言葉を教えます。鳩鶴などの下位概念を理解した上で、初めて鳥という上位概念が理解できるのです。

そうすれば、初めて「オウム」や「カナリヤ」を見ても、「名前はわからないが、鳥の仲間だ」ということだけは判断できるようになります。

鳥や虫に関係なく、これら同じ仲間のものを「一つ、二つ」と言って教える「数」は、さらに抽象的な言葉です。鳩や蟻から鳥や虫という抽象化を十分に図った上で、「数」を教えることが大切です。十分に抽象能力を育てることをせずに、数を教えるべきではありません。

「鳩・鶴」から「鳥」へ

元来、耳でとらえる「言葉」よりも、目でとらえる言葉（漢字）の方が、理解しやすく覚えやすいことは、すでに何回も言ってきた通りです。だから、「言葉を先に教えて、あとから漢字を教える」というのは、教え方が逆であり、誤っていると言うべきです。しかし、先にも述べましたように、現状では、まず「言葉」を、それから「漢字」を教えることにします。

鳩 鶴 鶏……、こういう言葉を覚えたら、鳩 鶴 鶏……、という漢字を教えましょう。言葉では、はどどづる」とに共通するものではありません。鳩と鶏が同じ仲間であることは、言葉の上ではとても考え出すことが出来ません。

ところが、鳩 鶴 という漢字で書き表わしますと、鳩 という共通部分があることに気づき、鳥 とは何だろうという疑問を持つようになります。疑問を持ち、質問するようになった時、初めて 鳥 という言葉を教えるのです。

親や教師というものは、子供が関心を示していないのに、とかく教えようとしたがります。しかし、「心ここにあらずれば聞けども聞こえず」で、関心のないことは耳に止まりません。

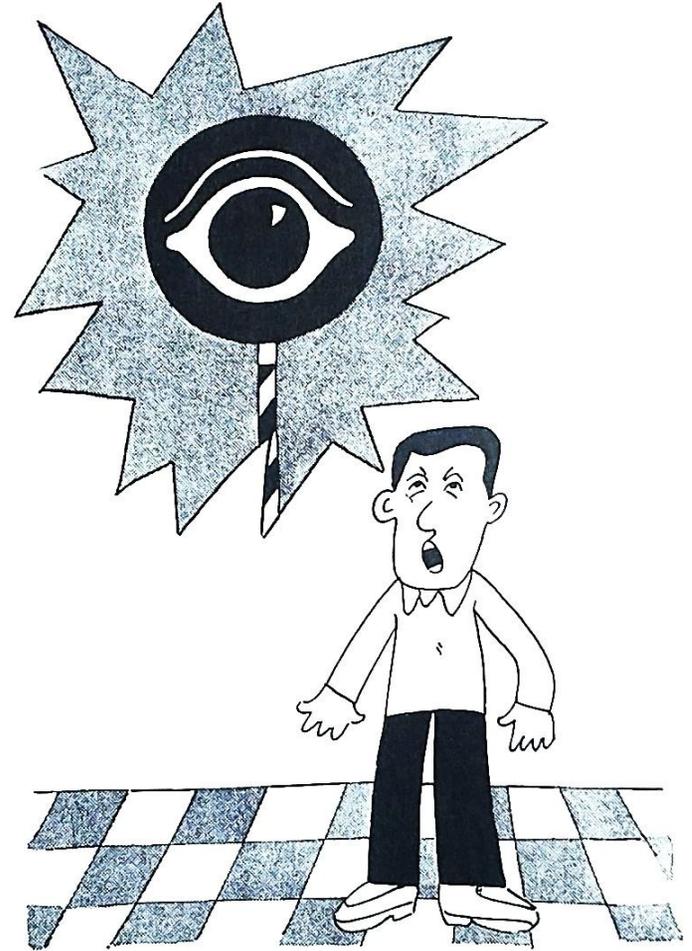
子供は好奇心に富む動物です。ほっておけば、鳩と鶴から 鳥 を、蟻と蜂から 虫 を、鯉と鱒から 魚 を見つけ出すに決まっています。その時に、鳥 虫 魚 という

言葉を教えてやれば、必ずよく理解し覚えます。その時機をあせらずに持つということが、教育には必要なことです。

ところが、それが待てないで、何でも教えてしまう親や教師が多いのは、実に残念なことです。食欲のないのに、次から次と食べ物を口に押し込まれるようなもので、物を知る喜び（食欲を満たす喜び）を知ることが出来ませんから、真の向学心に燃える人間になることが出来ません。

言葉は「実体」と「漢字」と

三歳を過ぎて、新しい言葉を教える場合には、出来たら、実体に即して漢字と共に教えることが望ましいのです。実体」と言葉」と漢字」と、この三者を結び付けて頭の



漢字は実在を思い起こさせる視覚的な信号

中に記憶させることが、言葉の学習では重要なことだと考えるからです。

「言葉」が、実在を思い起こさせる「聴覚的信号」であるのに対し、「漢字」は、実在を思い起こさせる「視覚的信号」です。だから、幼児が実在に触れることに、実在を体験することに、これを「言葉」で表現して示すと同時に「漢字」でも表現して示すことが大切なのです。

視覚の方が聴覚よりも記憶保持の効果が強いばかりでなく、同時に両方の器官に記憶させた方が数倍も記憶保持の効果が強まるからです。これは、アルファベットを使っているアメリカの実験で証明していることですが、漢字の方がその効果は一層強いものがあるのです。

「学問、音楽、学校、楽器」と、漢字で表記しますと、「学問」と「学校」との関連があり、「音楽」と「楽器」と関連があることがすぐに解ります。ところが、「がくもん、

おんがく、がっこう、がっきを、ひらがなで表記しますと、がくもん」とおんがく、がっこう」とがっき」と関連づけたくありません。

「おんがく」は「音の学問」と誤解する人が出て来るかも知れませんが、あるから「がっこう」と言っのかと思う子供があるかも知れません。

ともあれ、日本語は、漢字によって組み立てられ、作られた言葉が多いので、漢字と共に理解することが、正しい理解にはぜひ必要なことです。そして、視覚と聴覚との両方から言葉を理解することが、記憶を確実にすることに役立ちますので、一層言葉を漢字と共に学習することが必要だ、ということになります。

牛乳の牛はうしであるが……

牛乳瓶には「牛乳」という漢字が書かれています。だから、生活の中で、実体に即して「ぎゅうにゅう」という言葉と「牛乳」という漢字を結び付けて教えることが容易に出来ます。

この場合、「牛乳の牛」という字は、「うし」とも読め、乳という字は「ちち」とも読めるのよ」と、つい教えたくりますが、こういう教え方は避けるべきです。「牛」は「うし」とも「ぎゅう」とも読む、などという、実在から離れた知識を、子供が求めもしないのに与えようとするから、楽しんで憶えられるものが、頭を痛めて、しかも憶えにくいものになってしまうのです。

「牛」が「うし」であることは、牛という実在に接した時、「これが「うし」という動



牛乳の「ぎゅう」と牛は幼児にとっては別のもの

物なのよ」と言っただけで教えるべきものです。あわててはいけません。

また、その後生きた牛に接して、牛という漢字を教える場合でも、「この字は、前に教えてあげた『牛乳』の『牛』ですよ」などと口走ってはいけません。これも、栄養のある食べ物だからというので、子供の口に無理に食べ物を押し込むようなものです。

それよりも、「お母さん、牛という字は、前に習った『牛乳』の牛と同じ字じゃあないの」と、子供がそれに気づいて指摘するまで待った方がよいのです。その時に、「まあ良いところに気が付いたわねえ。忠男のことを、『ただおさん』という人もいるし、『たちあちゃん』という人もいるように、同じ物にいろいろな言い方があるのよ。牛も、『うし』という言い方と『ぎゅう』という言い方と二つあるの。『牛の肉』、『牛の乳』を一つにまとめて言うような時には、『牛肉』、『牛乳』という言い方をするのよ」と教えてやりますと、子供が自ら気付いたことではあり、それを認められたことだけに、進んでこれを受け入れ

るものです。

幼児の周囲に漢字カードを

幼児は、飛び交う言葉の中で生活しているうちに、ひとりずに言葉を習得しているのですから、漢字の学習も、幼児の目に触れる所に漢字を満たしておくのが最も効率的である、ということが出来ます。

机には机、壁には壁、花瓶には花瓶、という漢字を書いた紙片を貼っておけば、必ず幼児は、これに関心を示します。その時、これを読んで聞かせれば、すぐに覚えてしまいます。

一歳半で三百字の漢字を覚え、たという、田中庸介君も、家の中の漢字を読んでやったところから始まったと言います。電灯などは、電灯から短冊を下げて、それに書いておけば、幼児は興味をもってこれを見るでしょう。

漢字カードは墨と筆で書くのが普通ですが、色のマジックペンで書くのもよいと思います。赤や紫や青や緑、いろいろ美しい色で漢字カードを作ると、幼児の興味を一層惹くに違いありません。

あらゆる品物や場所に漢字カードを貼りつけたとしても、家の中では限りがあります。また犬や猫や小鳥を飼っていたとしても、これらの生き物に漢字カードを貼り付けるわけにはいきません。

これらのものは、絵本の絵を利用するのです。犬の絵のそばには「犬」、猫の絵のそばには「猫」と書き入れます。こうすれば「山、川、木、森、自動車、電車、空、雲、星、月、お爺さん、お婆さん……」ほとんど何でも教えることが出来ます。



子供の目にふれるものにはすべて漢字カードをつけて

現在出版されている幼児用絵本というと、ほとんどかな書きです。このかなの上にそれが隠れるように紙を貼り、漢字を書き入れるのがよろしい。かなは初めのうちは幼児の目に触れないようにすることが必要です。少なくとも、漢字を百字くらい覚えさせないうちは、かなを教えるてはいけなからず。

初めから漢字を

初め、かなを習った者と、初めから漢字を習ったものとは、読書するようになって、読書のスピードが全く違うのです。頭の働きの良い子は、初め、かなから入った者でも、かなりの読書のスピードがありますが、それでも初めから漢字を習った子供にはとても及びません。



初めから漢字を習った子供は読書のスピードが早い

かなは、音声言語を表わした
 ものですから、逆にかな文字か
 ら音声をたどってその言葉を理
 解します。だから、かな文字で
 書かれたものを読むのは、音声
 言語を話す速度より速くても、
 また遅くても理解しにくくなり
 ます。

ところが、漢字は、事物を直
 接表わしていますから、その文
 字を目にした瞬間にそれを読み

取れます。『山、川、花、雪』というような漢字だけではありません。『電車、汽船、絵
 本、鉛筆』は勿論、『自動車、冷蔵庫』というような言葉でも、一瞬で読み取れます。

渡辺茂（東大工学部教授、工学博士）先生の実験によりますと、暗室の中に置いた漢字
 カードが、わずか百分の一秒のフラッシュで読み取れる、ということです。そのように、
 漢字は一瞬のうちに理解できるものですから、漢字を多く用いて表記された文章は、どん
 なに速くした音声よりも数倍も速く、目読することが出来るのです。

だから、初めから漢字で習った幼児は、初めから、「文字を一瞬のうちに読み取る」習
 慣を身につけます。音読する場合にも、先に目で一瞬のうちに読み取り、理解し、その上
 でそれを音読します。

ところが、初め、かなを学習した幼児は、書かれた文字を、言葉を話すのと同じ速さで
 発音し、その発音から言葉を想起し、理解するのです。漢字を理解してから音読するのと

全く逆であり、スピードが全く違います。

「読書は成長するにつれて速くなる」と言いますが、初め身についた習慣は、なかなか改まるものではなく、まず改まらないのが普通です。

読書は速い方が解りやすい

漢字をかなよりも先に学習した私の長女は、まだ小学校に入ったか入らないかという時期に読書のスピードが私のそれよりも速いということに気づきました。

試みに娘の読書する後から、私が読んでみますと、半分くらいしか読み終えないうちにページを繰ってしまいます。そこで私もスピードを上げるのですが、やはり読み終えないうちにページをめくられてしまいました。

それで、この速さで果たして理解できているのか、と思った私は、あとで内容についていろいろ質問してみました。すると、ちゃんと立派に答えるのです。そこで、私は、速く読み取ることと、理解することとは矛盾するものではない、と考えるようになりました。実は、それ以前、速読法 という書物を読み、速読の練習をしましたが、速読すればどうしても理解の面で不十分になる。それで速読と理解とは反比例するものだ、と私は思っていたのです。

しかし、娘のように、初めから速い読み方をしている者と、私のように、あとから努力して速く読もうとしている者とは違う、ということに、この時気が付いたのです。

最初が大事なのです。最初身につけた習慣というものは、なかなか改まるものでなく、無理に改めようとすると、その無理が別の面でマイナスとなって現われるものです。

だから、私たちのように、初めかなから学習したものは、どうしても読書が遅くなりま

す。けれども、それを無理に改めない方がよい。もっとも、読書の種類によっては、速読法に頼るのもよいと思います。しかし、真の読書は、遅くても自分のペースで読まない、大事なことを読み落とす心配があります。そう思って、今では、甘んじて、ゆっくりと書物を読むことにしています。それだけに、これからの文字学習は、絶対に「かな文字から始めてはならない」とつくづく思うのです。

かなはいつ、どのように学ばせるか

それでは、「かなはいつ、どのように学ばせるか」と言いますと、漢字を二、三百字覚えさせた後、次のようにして教えることにしています。

すでに知っている「白、赤、青、雪、花、空」をつなぎ合わせて、「白い雪、赤い花、



赤、白と雲、花の間にある文字を子供たちは推測して読む

青い空 という言葉にして、これを幼児に与えるのです。これらの言葉は、すでに知って使っているものですから、すぐに「い」を理解し、覚えます。

つまり、幼児たちは、「白い、赤い」という言葉を使っているのですが、ただ、言葉を分析して、「赤い」という関係にまで理解が及んでいないのです。だから、言葉としてすでに使っている「赤い花」を、漢字とかなとて書き表わしたものを見せてやれば、すぐに「い」という音声と、その音声を表わしたかな文字とを認識し、理解します。

そこで、幼児は、言葉には「白、赤、花、……」のように意味、内容のある言葉と、「い」のように意味、内容のない言葉とがあることがわかるようになるのです。

こうして、「海は広いな。大きいな」というような文に進んでいきますと、「海、広、大」といった概念をもった字に対して、「は、い、な」というような単なる音声を表わす文字の存在に気付き、漢字は主として概念や観念を表わすものであり、かなは単なる音声

を表わすものであることを理解するのです。

これは、現実の文章の表記の事実から、体得するものであって、理屈で理解させるものであってはなりません。言葉や文字表記というものは、理屈で理解したのでは何にもなりません。身について、習慣となり、考えないで言葉となり、表記となるものでなければなりません。

初め「うみはひろい」と学習し、後で「海は広い」と改めるようでは、身についたものになるはずがありません。

かなはこうして学ばせる

「い、や、の」というかなで、漢字とは本質的に違った文字のあることに気づかせるこ

とが、まず第一です。漢字は「花」と「鼻」の例で解るように、発音には関係がなく、物その物を表わした文字ですが、かなは全くその反対で、内容がなく、ただ発音だけを表わした文字です。それを理屈でなく、体験的に幼児に理解させることが大切です。

次に、「歩く」「動く」「書く」「泣く」という言葉で、「く」というかなに気づかせます。決して「歩十く」と分けて教えてはいけません。けれども、幼児たちは、これらの言葉を覚えていくうちに、共通する「く」に気づき、「く」という発音の字だと理解するようになります。

その時、この「歩く」という言葉は、「歩かない、歩きます、歩け、歩こう」と、変化する言葉であることを教えます。続いて、子供たちに、「動く、書く、泣く」という言葉を与えてそれがどう変わるか、考えさせます。

動かない 書かない 泣かない

動きます 書きます 泣きます

動く 書く 泣く

動け 書け 泣け

動こう 書こう 泣こう

このように皆同じ形になることに幼児は驚異の目を見張ります。そこで、「動かない」の時は「うごこく」でなくて「うごか」になる。だから、「動かない」と「か」と発音することを表わす文字を入れたのだ、と理解させます。

こうして、「かきくけこ」という発音を表わすかなの必要性を理解させると共に、これを覚えさせるのです。「観念語は漢字で、かなは単なる音声を表わす語に使用する」という日本語特有の表記法の原理を、幼児のうちに体で理解させるのです。

次に、「流す、起す、賃す、出す」で「さしすせそ」を、「勝つ、立つ、打つ」で「たち

つてと」を教えます。

漢字が書けても書かない子

小学校の先生方は、「テストでは書ける漢字が、作文やノートには使われない」と言っていて嘆いています。その理由は、初め、何でもかなで読んだり書いたりする習慣を身につけているからです。

思考と言葉が同時に進むように、文章を書く時には、ただ書きたい内容についての思考が働いていて、それ以外の思考は書くためには妨げになるばかりです。だから、文章を書く時に「出来る限り、知っている漢字を使って書こう」という意識は、文章を書く時には、文章を書く妨げになるものです。

つまり、文章を書くことに専念すれば、かな先習の子供は、身についたかなだけで書くのが当然であり、漢字を多く使おうとすればそれだけ文章がうまく書けなくなってしまうわけです。

だから、読書が速く出来るためにも、文章を書く能力を高めるためにも、初めから漢字表記で学習させ、決してかなで学習させてはいけません。初め、「うみ」と学習させ、あとで「海」と学習しなおさせることは、読みの上でも、書きの上でも、大変な問題があることを、皆さん、よく知っていたきたいと思います。

なお、蛇足になるかも知れませんが、初め、「かな」で学習した子供は、漢字が書けるようになっても、習慣上、ついか書きをしてしまいますから、漢字を書く能力が育たないばかりか書けなくなってしまう危険があるのです。

反対に、初め、漢字表記で学習した子供は、漢字で書くものと思っっていますから、書け

ない場合でも、決してかな書きで済ませることをしません。必ず調べるか、教えてもらうかして漢字で書きます。だから、今は書く能力が未熟でも、必ず書く能力が育ち、立派に書けるようになるのです。

漢字学習では、**義**が最も大切

今までの漢字教育と言えば、読むことと書くこと、それも一点一画まで極めて厳格に、しかも一定の筆順で書くことが重視されていました。

しかし、私の漢字教育では、読みや書きよりももっと重視するものがあるのです。昔から、**形・音・義**という言葉がありますが、形は書きに、音は読みに関するものです。勿論、形も音も大切ですが、その形と音とに生命を与えているのが**義**です。



なによりも体験的に漢字の意味を知る

たとえば、『熱い』という漢字があります。しかし、この字を『あつい』と読めて、それを筆順正しく、形が正しく書いても、この字の持つ正しい『義』を理解していなくては、何にもなりません。

極端に言うなら、正しく読めなくても、また書けなくてもよい。その意味を正しく理解できるならそれで結構、というのが私の最も強調したいところです。

だから、この漢字を幼児に教えようとするなら、まず、熱湯を瓶に入れ、この瓶に『熱い』という漢字カードを貼り付け、これを幼児に与えます。幼児はこの瓶を握ってみて、「あつい！」と叫んで手を離すでしょう。その体験が、『熱い』という漢字の『義』です。

この『義』を中心に、それを『あつい』という言葉（音）と『熱い』という字形（形）とに結び付けて、これを脳に記録することが私の主張する漢字教育です。

こういう漢字学習をした子供は、『熱い』という文字を見れば、途端に、あの「あつい！」と叫んだ時の感触が頭の中に甦り、その体験をまざまざと思い起こすでしょう。それが漢字を読むことの意義です。

単に『あつい』と読めても、また正しくその字が書いても、こういう体験が伴わなかったら、「その漢字教育は成功しなかった」と私は言いたいのです。

漢字は体験を呼び起こす信号である

『重い』 『軽い』という漢字は、二つのマッチ箱を用意し、これに、それぞれ『重い』 『軽い』という漢字カードを貼り着けます。『重い』というマッチ箱には、釘か鉛でも詰めて、『軽い』というマッチ箱には、綿を詰めておきます。

『長い』 『短い』という漢字は、二本の使い古しの鉛筆でも用意するとよろしい。長い



本物の牛を見せるために遠くの牧場に一日がかりで

方の鉛筆に、「長い」という漢字カードを紐で結び着け、短の方の鉛筆に「短い」というカードを結び着けておけばよいのです。

こうして、漢字の持つ意味を、体験を通してよく理解させることが大切です。漢字

は、その体験を呼び起こすための信号なのですから、体験を通して理解しないことには始ま

りません。漢字と体験とがよく結び着いていて、漢字を見れば、一瞬のうちにその体験が頭の中に甦って来るようであればなりません。

それには、生活の中で、生活に密接した体験をさせると同時に、これを漢字に結び着けて記憶させる工夫が大切です。

脳障害児、郁子ちゃんのお父さんは、この子に「牛」という漢字を教えるために、数十キロも離れた牧場に一日がかりで出掛けています。実際の牛を見なくては、いくら「牛」という漢字が読めて、それが筆順正しく書いても、その価値は半減します。

勿論すべてを体験することは幼児にとって困難というよりも不可能というべきでしょう。牛だって、写真や絵本で間に合わせなければならぬ場合が多いかも知れません。しかし、同じ「牛」という字を見ても、それが実物の生きた牛を思い浮かべるか、絵本の牛を思い浮かべるか、では大変な違いがあるのですから、なるべく労を惜しまないで、実物

体験を通して漢字を教えて頂きたいと思えます。その方が、幼児が漢字を覚える意欲を一層強めることにもなるのです。

毎日一字ずつ漢字を……

当用漢字は一八五〇字ですが、このうち八八一字が通称「教育漢字」と呼ばれるものです。これが制定された当時は、義務教育期間（九年間）中に習得すべき漢字として、選んだものですから、「教育漢字」という名称が付いたものです。

ところが、昭和三十六年の学習指導要領の改訂の際、小学校の六年間に習得すべきものと改められました。さらに、昭和四十六年には、これに百十五字を加えて、小学校を卒業するまでに習得すべき漢字が九九六字となりました。

このように、改訂のたびごとに学習漢字がふえて来ましたが、それでも、六年間に学習する漢字が一千字に達しません。一日に一字ずつ覚えていったら、三年間でも一千字は覚えられます。

幼児期の幼児は、一日に一字くらい覚えるのは何でもありません。負担になるどころか楽しみになるくらいのもです。だから、幼児期に、毎日一字ずつ漢字を教える計画を立てることをお奨めします。

「石の上にも三年」という諺もありますように、何事でも、三年くらいは継続してやることが大切です。そのくらいの辛抱が出来ないようでは、何をしても成功は望めません。漢字教育も一日一字の学習を三年間続けたら、一千字を超えます。

小学校へ就学する三年前から始めたら、小学校の一年生になるころには、一千字の漢字が読めるようになってはいます。そうすれば、今の中学一年生の漢字力よりも上回る

ことになりまますから、小学生向けの書物だったら、どんなものでも、ラクラクと読めるようになっていないはずだ。

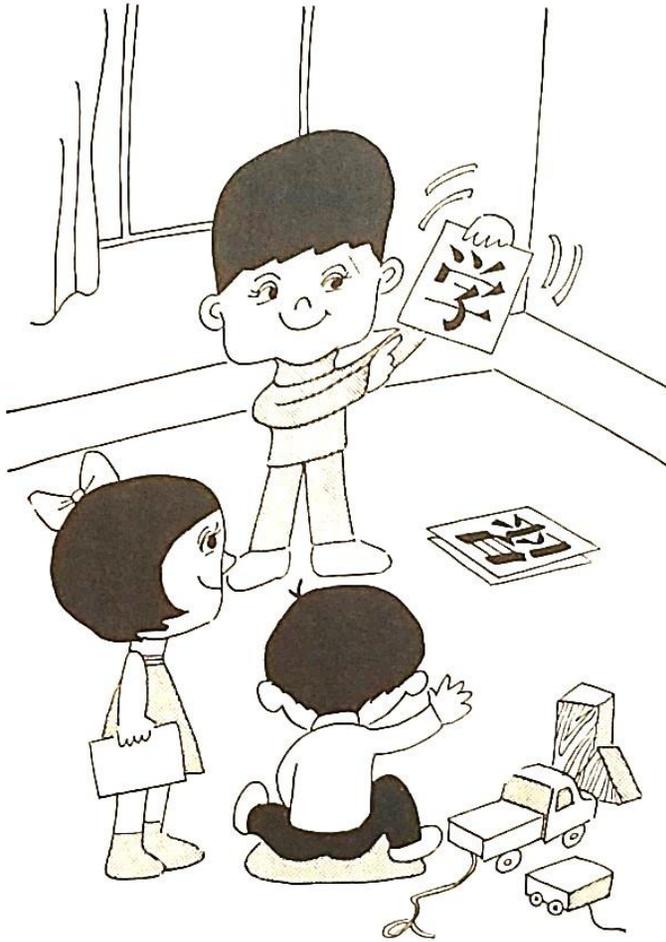
そうならば、理科の教科書でも社会科の教科書でも、すらすら読めて、すぐに理解できはるはずだ。そうならば、学校へ行くのが楽しい、成績の良い子供に自然となります。

七分をいっぺんに……

一日一字のペースでも、これを確実に、毎日一字ずつ与えていくやり方と、一週間分をいっぺんに与えて、一週間ごとにこれを進めていくやり方が考えられます。

幼児がかなを覚えるための玩具として、市販されているものに「文字板」があります。

犬の絵の裏に「い」という文字があり、馬の絵の裏に「う」という文字がある、というも



文字板を与えて遊びながら学習する

のです。

これは、漢字学習に利用できます。いの上に紙を貼り付けて、犬という漢字を書き入れ、うは馬という漢字に改めればよいのです。

こういう文字板を、一週間に一度、いっぺんに七枚与えてしまうのです。それで、一週間の間に、七枚の文字板を繰り返して見ている間に、これらの七字の漢字をみな覚えてしまふことを期待するものです。

「この字は何という字だろう」と思って、裏返してみれば絵があるのですぐに解る。こういうことを繰り返してやっていたら、幼児は自然に漢字を覚えることでしょう。これは、幼児が独りで覚えるのに適した方法です。

とは言うものの、それだけでは不十分です。時々、お母さんが、文字板の文字の面を表にして並べてやり、お母さんの読んだ文字をその中から拾わせることをして下さい。カル

タ取りのようにして遊ぶのです。

「はいね」「よく取れるね」と賞めてやりますと、得意になって張り切ってやることでしょう。そうなれば、読めない字も早く覚えて読めるようになります。

一週間たって、次の七枚を与える時は、前の七枚は回収した方がよろしい。しかし、その週の終わりごろに、前の七枚と一緒にして十四枚で遊ばせることも必要です。時々そういうことをしないでいると、忘れてしまうということもありますが、「覚えているものを読む」という、そのことに大切な意義があるからです。

新しい漢字よりも反復が大切

学校では、熱心な先生でも、覚えるまでは反復して熱心に教えますが、覚えてしまった

らそれで完了とばかり、それ以上には反復練習することをしません。勿論覚えたいのは、覚えたい子供が悪いのだ。こちらは、覚えようが覚えまいが、教えるだけで責任は果たしたことになるのだ、という先生もいますが、これは論外です。

しかし、言葉や文字の学習は、これを覚えるまでの反復練習よりも、覚えてからの反復練習の方が重要なのです。そもそも、言葉や文字の学習は、それを覚えることよりも、それを使うことに意味があるのですから、覚えるための練習よりも、使うことの練習(覚えてからの練習)の方が多くなくてはおかしいことです。

ところが、親でも教師でも、覚えるまでの学習には熱心でも、覚えてからの学習には極めて冷淡です。余計なこととばかり、子供が熱心に練習していても、これを賞めるどころか、「もういい加減にしなさい」と、ブレーキを掛ける親や教師が多いようです。

言葉や文字というものは、「考えて正しく使う」というものではありません。「ひとり



漢字の学習も基本が大切、反復練習が大選手への道

に正しく使える」ようであればなりません。それには、いくら反復練習しても、繰り返し過ぎるといふことはないのです。

幸い、幼児というものは、反復が好きで好きでたまらないように出来ています。だ



食事の前後に合計わずか1分、漢字の学習をあきずにやる

からどんな言葉でも完全に身につけることに成功できるのです。大人で外国語の学習に成功しにくいのは、この反復が苦手だからです。だから、「よく考えないと話せない」程度の語学力しか身につかないのです。

野球でも、走ることに、投げることに、バットを振ることは、どんな大選手になっても決して怠りません。いや、そういう基本的なことを飽きずに反復練習できる人が、大選手になれる資格があるのだ、と言っべきでしょう。

一日一字をどのように与えるか

俗に「三日坊主」という言葉があります。熱しやすく冷めやすいのは日本人の通性らしく、大層熱心のようにだと思える人でも、しばらくすると全く打って変わったように冷淡に

なっていて、よくがっかりさせられます。

「石の上にも三年」……何事も最低これだけの努力が欲しいと前に申しましたのも、私は今までたびたびがっかりさせられて来たからです。それで、今では、どんなに有効な方法でも、実行に困難なものは紹介しないことにしています。少々効果は劣っていても、実行しやすく、長続きの出来ることが良い方法だと思っております。

さて、その具体的な方法について述べましょう。毎食事の前後に、漢字カードを子供に

見せて、これを読んでやるのです。見せる時間は、毎回約十秒間で十分です。五秒間では少な過ぎますが、十五秒間では多過ぎます。過ぎたるは及ばざるが如し、少な過ぎてもいけません。五秒以上十五秒以内なら結構です。

初めは、子供の喜びそうな内容を持った漢字がよろしい。たとえば猫の好きな子には「猫」を、「これは坊やの好きな猫という字よ。ねこ、ねこ」

と言って教えてやります。普通の速さで、少し大きめの声で、口を大きく開いて、はっきりした発音で、二、三回繰り返して読んで聞かせます。

一日三回、食事の前後にやりますと、毎回漢字を見せて読んでやるのが十秒間として前後で二十秒それが朝、昼、夕食事で六十秒の学習で済みます。これが第一日目の学習です。これなら、だれでも「忙しくて出来ない」ということはないと思います。

いつでも、必ず幼児に漢字カードをよく見させて、その上で読んでやって下さい。幼児に関心を向けさせる配慮が必要です。幸い、幼児は好奇心が旺盛ですから、幼児の好きな物を表わした漢字なら、必ず関心を持ってこれを見、覚えます。

六回に至らないうちに覚えてこれを読んでも、必ず六回繰り返して読んでやらなければなりません。

第二日目は……

さて、第二日目は、昨日読んでやった漢字カードを見せて、「これは何というカード？読んで頂戴」と言います。すると、百人に一人くらい読めない子もありますが、たいしては、一日三回の反復練習でその漢字を覚えてしまい、「ねこ」と読みます。

読めたら、「よく読めたわね。では、今日は、坊やの大好きな「莓」という字を教えて

あげましょう。これは「いちご」という字。いちご。坊やも読んでごらん下さい。はい、いちご」と、第一日のやり方と全く同じ要領でやります。

第一日と違うのは、第一日の漢字を先に見せて「これ、何という漢字?」と言って訊ねることが加わるだけです。これも、「第一回目に読めたから、第二回以下省略」はいけません。読めたから、読んでもらうのです。読めるようになった字を読ませることが大切なのです。

では、百人に一人の読めない子だったら、どうするか、です。「きのう、六回も教えてやったわよ」などと言って、子供を責めてはいけません。その場合は、初めて教えるような顔をして、「これは坊やの大好きな『猫』という字よ。では一緒に読んでみましょうね。はい、『ねこ』」と、やさしく教えてやることです。

決して、よその子供と比較して、子供を責めたり、あせって子供に押し込むように圧力を加えてはいけません。むしろ、大器晩成型の頼もしい子供に、一週間くらい少しも覚えそうにもない子供がいます。

こういう子供は、軌道に乗ればしめたものですが、それまでは骨が折れます。その代わり、そういう子供の方が成功の喜びも大きいのですから、あせらず、じっくりと落ち着いて教えることが必要です。

第一回目の質問で読めなかった子には、第二回以降「これなあに?」という質問はやめて、「これば『ねこ』という字よ」と第一日と同じことを繰り返してやって下さい。

第三日目は……………

さて、第三日目です。まず第一日の漢字を見せて「これは何という漢字?」と言って質

問します。答えたら、「よく読めたわねえ。ではこれは何という字でしょう?」と言って第二日目の漢字を見せて読ませます。

それも正しく読めたら、「この字もよく覚えたわねえ。では今日は花 という字を教えてあげましょう。この花 は、顔にある鼻ではなくて、チューリップの花の花 という字よ」と言って、第三日目の漢字を教えてやります。

この形を、やはり一日に六回繰り返し返してやります。「これなあに? よく読めたわね。ではこれなあに? これも読めたわね。では、今日の新しい漢字」という形を六回繰り返し返してやるのです。

もし、第二日目の漢字が読めなかったら、第三日目は、第二日目にやったことと、全く同じことをもう一度繰り返し返してやるのです。一日遅れたからと言って、あせってはいけません。初めの二か月、とりわけその初めの一週間が大切です。ここであせっては、子供が



前日の漢字が読めなくとも、あせらずに

漢字をきらうようになります。そうなったら、遅れは一週間や一月ではおさまらなくなり
ます。

だから、読めなくても、お母さんにはっこりと笑って、初めて教えるような態度で、やさしく教えてやる心掛けが必要です。

最初の一週間を、あせらず落ち着いてやれたら、子供の方もよく飲み込めて、あとは調子よく覚えるようになるものです。むしろ、初め飲み込みの悪い子の方が、いったん軌道に乗ると初め飲み込みの良い子よりも、うまく進むことが多いようです。

だから、初め飲み込みが悪いと言って、決してがっかりしてはいけません。親ががっかりしたら、それは子供に敏感に影響します。決して感情を露骨に表わさず、にっこりと笑って子供に接していただきたいと思います。

反復は一日六回、七日間

さて、もう十分お解りいただけたと思います。順調にいけば、一日ごとに「これ何と読む字？」と質問するカードが一枚ずつふえていきます。だから、第八日目には、「これなあに？」と訊ねるカードが七枚になります。この質問するカードは七枚までで、これから後は、新しいカードが一枚ずつふえていきますが、同時に一枚ずつ減らしていきますから、この八日目以降は「毎日七枚ずつ質問して、新しく一枚教える」という決まった形になります。

つまり、一日を覚えるための学習に使い、覚えたら、それに続く七日間を読むための学習に使う、というわけです。読めるようになった漢字を、毎日六回ずつ読み、それを一週間続けたら、その漢字は一応「卒業」というわけです。

一日六回、それを一週間することは、四十二回繰り返したということですが、これだけ繰り返せば、その記憶はかなり継続します。うまくすれば一生のものになります。一生のものにならなくても一年、二年、いや数か月の間にどこかで目に触れ、読む機会がきつとあるはずですが。

そうすれば、それが記憶をさらに強めることになり、一年のものなら二年に、二年のものなら三年に、というように記憶が継続されます。

そういう漢字の記憶の累積が、三年間には一千字になります。小学校就学の三年前、三歳の時からこの学習を始めれば、一年生に入学するまでに一千字。この数字は、今の小学校で六年間に学習する漢字の数を上回ります。その一千字を身につけて小学校に入学すれば、小学生程度の本なら、どんどん読みこなして身につけることが出来ます。

書物ほど人間の好奇心を満してくれるものはありません。その書物が読まれないのは、読む力、漢字力が弱いからです。親として、この漢字力をつけてやる仕事に励んでいただきたいと強く希望するものです。

幼児の喜びそうな漢字から

幼児に与える漢字を、どのようにして選んだらよいか、と言いますと、一口に言えば、幼児が喜びそうな内容を持った漢字が選択の基準です。そういう漢字が、幼児にとっては最も覚えやすいのです。

記憶の原理は、一に「関心」二に「#」反復です。「心」ここにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞こえず」です。関心のないことは、幼児はどんなに熱心に教えてやっても決して覚えません。



幼児の興味さえあれば字画の多少は関係ない

幼児期は記憶力の最も旺盛な時だと、最近の脳生理学者は説いています。だから、幼児は関心をもって聞いたことは、覚えようという意志も努力もなしにこれを覚えてしまいます。だから、幼児の関心の強い内容を表わした漢字が最も覚えやすいのです。そういうやさしく覚えられる漢字から教えていくのが、最も効果的な手順ということが出来ます。十数年前の実験で、「一」「二」「三」という最も覚えやすいと思われる漢字を覚えるのに三か月もかかった能力の低い子供が、容易に「雪」や「雲」を覚えたのに驚きましたが、興味のない数字は、どんなにやさしく見えても覚えず、興味ある「雪」や「雲」は、自然に記憶にとどまるものである、ということをよく証明しています。

字画の簡単な漢字は、一般に覚えやすい、と思われていますが、「一」や「二」が覚えられないという例が示しているように、陥りやすい誤った推察です。むしろ、複雑な字形の漢字の方が、記憶の手がかりが多くて、記憶に残りやすい利点があるようです。複雑な

顔の人の方が記憶に残るのと同じ理屈だと思えます。

ともあれ、字画の多少などに関係なく、幼児にとって興味を示しそうな内容をもった漢字を選んで、そういう漢字から教えていけば、幼児は喜んで漢字を覚え、漢字を覚える能力も自然と発達するものです。

とは言うものの、程度問題

漢字の選び方は、原則的に言えば、幼児の喜びそうな漢字ですが、余りにこれにとられることもいけません。「易から難へ」というのは、学習の初期においては確かに重要だと思えますが、いつまでもそれでは、難を乗り越えて進む強い人間になれません。

余り消化の良い物ばかり食べていたのでは、ちよつと不消化な物を食べたり、食べ過ぎしても病気になるやすい虚弱体質を作る恐れがあるように、余りに用意された教材ばかりで学習していると、ちよつとした難問にはすぐに手を上げてしまふ、頭の弱い人間になる恐れがあるからです。

その意味では、この漢字はむずかし過ぎないか、あれもこれもむずかし過ぎないか、と考えないで、少々がむしやらに選んで、どしどし教えた方が、強い人間を作ることになるのではないかと思われまふ。

ただ、最初から不消化な物を食べさせてはいけないと思えます。ある程度まで進んだら、余り神経質にならないことです。

それともう一つ注意すべきことは、「漢字を教えよう」という気持を露骨に表わさないことです。

「食べ物腹八分目」と言われていますが、何事でもその気持が大切だと思えます。親



あまり消化のいいものばかり与えていると虚弱児に

でも教師でも子供を良くしたい余りに教え過ぎるきらいがあります。これは、逆効果を招いて、知識欲の乏しい子供を作る恐れがあります。

幼児は、元来、好奇心が旺盛で放っておいても、あれも知りたいこれも知りたい、と思つものです。だから、好きな絵本に漢字カードが貼られていれば、子供の方から、「こ

れなあに？」と尋ねて来るものです。

質問を待つて教えてやれば、子供は満足するし、一度教わっただけで決して忘れませんが、子供が望まないのに教えてやったのでは、覚えないうし、万事受け身の消極的な子供になる恐れがあります。

書くことは急がないこと

今の教育は（明治以来）読み書き同時教育です。しかし、私の実験で、読み先習、書きは急がない方が、わずかの時間で早く正しく書けるようになることを証明しました。

漢字が読めて、意味もよく解り、その字を読む機会を重ねていますと、自然にその字形が頭の中に正確に形作られていきます。そうなるから書く練習をしますと、今までの練

習時間の三分の一、四分の一の時間でも、今までよりも正しく美しく書けるようになりま
す。

だから字形が頭の中に形作られていくまで、急がず待っていることです。頭の中にな
いものを書くのでは、一点一画にも手本と引き比べなければならず、書いたものも不正確で
醜いものになるわけです。

読み書き同時学習では、練習効果が上がらず、練習が苦痛なものになるのが当然です。
それに反して、読みの学習を十分にしてい、字形の認識が進んだ上で書く練習をすれば、わ
ずかの時間で書く技能が向上しますので、書く学習も楽しく、いよいよ能率が向上するわ
けです。

だから、小学校に入学するまでは、書く練習を期待しないのがよいと思います。幼児に
漢字が書いても、それを書くことに価値を見出すことが出来ません。それよりも、読むこ
とこそ、どんなに多く読んでも読み過ぎることがない、と言ってもよいほど価値の高いこ
となのですから、読む機会を多く与える努力をすべきです。

漢字力が理科や社会科にも関係する、というのは、漢字を読む力のことであって、書く
力のことではありません。

ところが、どうしたことか、何よりも重要な「漢字を読む」学習を重視しないで、「漢
字を書く」学習に、親も教師も力を入れています。どうも、本末を順倒しているとした言
いようがありません。

漢字カルタ

漢字をある程度（百字くらい）覚えたら、漢字を一字ずつ覚えるやり方に加えて（もし

絵札はすべてクリちゃんが主人公になっていて、根本進先生に全部、文に合わせ、かわいいクリちゃんを主人公に描いて頂きました。また、読み札は、活字にせず、望月美佐先生に書いて頂いたものを縮写しました。

幼児に与えるものは、出来る限り、最高のものでなければなりません。一般に市販されているカルタなどの中には粗悪な物も多く、幼児の心を養うどころか汚されてしまいそうです。そこで、根本、望月両先生にお願いして、芸術性の高い作品を刊行させました。

幼児たちは喜んでカルタ遊びをします。その間に、いつももなく絵札と漢字を覚えてしまいます。すると、子供たちは、絵札よりも、字札をまいて字札を拾いたがるようになります。

今、私の幼児教室では、幼児が楽しんで、字札を拾うカルタ遊びをしています。こういう遊びの中で、自然と、文章を速く読み取る訓練が出来るようになります。

ただ、一字一字についての認識は、こういうカルタ遊びからは高まりません。そこでその中の一字一字を、別に漢字カードにして学習させる必要があります。

本を読んで聞かせること

「漫画やテレビにばかり夢中になって、ためになる本は少しも読もうとしない」というお母さんの声をよく聞きます。しかし、幼児から漢字に親しんだ子供たちは、その反対です。漫画やテレビよりも、ためになる本をよく読みます。漫画やテレビに見向きもしない子供さえいます。

もともと書物というものは、好奇心を満たすに十分な楽しい内容を持っているものです。それを読まないのは、①書物のおもしろさを知らない、のか②知ってはいるが、読む力が

ない（漢字の力がない）のか、そのどちらかです。

①の場合は、親が本を読んで聞かせることが大切です。毎日、本を読んでやるのです。子供は飽きることを知りませんから、同じ本を繰り返し繰り返し読んでやることです。

その本は、かな書きの本であってはなりません。それは読んでやるのに骨が折れるからです。注意していても「おばさん」と「おばあさん」とを読み違えます。これでは読み手も疲れるし聞き手も興ざめです。漢字の多い文章は、余裕をもって読むことが出来ます。子供の表情を覗きながら読むことが出来ます。だから、幼児に読んで聞かせる本は、漢字の多い本を選んで下さい。

幼児は、毎日、毎晩、聞いていますと、すっかり覚えてしまい、ちよつと読み違えたり、飛ばしたりしますと、すぐに「違う」と言って訂正します。そうなりますと、自分でも大人の真似をして読んでみたくなります。

その時、漢字の方が幼児にも読みやすいので、読書好きの子供になるのです。私の観察によりますと、この時、かなばかりの本だと幼児には読みにくくて、自分で読もうとする気持が弱まり、いつまでも親に読んでもらいたがるようです。だから、出来る限り漢字の多い本を選ぶことが大切です。

連想式漢字記憶術

②の場合は、言うまでもなく、漢字力の強い子にすることが先決問題です。今の小、中学生は勿論、高校生、大学生でも、漢字力が弱いため、読書が苦痛で、読書を楽しむ者が大変少ないようです。

前にも述べましたが、東大新聞で、「東大生に最も多く読まれている雑誌は、少年マガ

ジンと少年サンデーである」と発表されていたのを見て、私は驚きました。結局、今の大学生は、漢字に弱く、そのため活字を読むのが苦痛で、読書の楽しみを味わうことが出来ないでいるのだ、とかわいそうに思いました。

漢字力を養うのは、幼児期が最適ですが、その時期を過ぎてしまった者はどうしたらよいか。それは、今までのような『機械的記憶』いわゆる丸暗記に頼っていたのではないけません。

漢字は、極めて立派な体系を備えた文字ですから、科学的に論理的に学習しなければ、記憶するのに骨が折れ、しかも記憶が浅くて忘れやすいのです。

自画自讃になりますが、『石井方式・漢字の覚え方』（学燈社）は、高校生や大学生のために、『連想式漢字記憶術』（朝日ソノラマ社）は、一般向けに、漢字を楽しく、効率良く学習するために刊行したものです。これを熟読して下されば、きっと飛躍的に漢字力が向上すると思います。

なお、小学生のためには『漢字学習図解辞典』（三省堂）をお奨めします。従来の辞典のイメージを完全に破って、どこを開いても思わず読んで見たくなるような辞典です。しかも、その成り立ちが、子供にもなるほどと解るように一字一字についてすべて解説してあります。中学生でも、漢字力の弱い生徒諸君には、漫画の代わりに、この辞典を読むことをお奨めします。楽しんで読めて、漢字力が自然とつくことを請け合います。

漢字教育の教材について

幼児の漢字教育が始まって、今年で十年になろうとしています。初めは、大阪の数か所の幼稚園で始められた教育が、非難にもめげず、隆々と育ち、今は北海道から沖縄まで、

数百の幼稚園が実践してくれるまでになりました。

石井方式漢字教育は、従来の漢字教育とは根本的に違うことを、世間の人々はなかなか理解してくれませんから、まだまだ茨いばらの道が続くことを覚悟しています。しかし、真理は必ずいつかすべての人に受け入れられることを信じています。

真理かどうか、頭の中で考えていただけでは決して解りません。実践してみてください。実践してみて、効果がなかったらやめて下さい。非難して下さいてもよろしい。しかし、実践してみないで、感情的に納得できないからというので非難するのはやめて頂きたいと思いません。

大阪の登竜館は、幼児の漢字教育が始まった直後から、幼児のための漢字の絵本を刊行して、この運動を献身的に援助してくれました。今では、毎月、初級用（三歳児）、中級用（四歳児）、上級用（五歳児）漢字の絵本が刊行され、これが教育実践幼稚園のテキスト

トブックに使われています。

なお『俳句かるた』『楽しい漢字カルタ』『漢字カード』など、楽しんで漢字が学習できる教材を刊行しており、また絶えず新しい企画を立ててくれます。

ただ、これらの教材は市販されていませんので、御希望の場合は左記にお問合わせ下さい。

〒五四三 大阪市天王寺区上本町六丁目三三三ー三〇一

株式会社登竜館 電話〇六（七七三）三九三一〜二番

〒一五〇 東京都渋谷区恵比寿南二一八六ー〇一

石井式国語教育研究会 電話〇三（七六〇）三四二〇番